

## 不透明な眼球

### ——「パートルビー」と不服従の詩学

---

山 本 洋 平

---

本発表では、ハーマン・メルヴィルの問題作「パートルビー」を当時の文化的ネットワークから読み解くことを試みた。タイトルに掲げた「不透明な眼球」とは、メルヴィルのエマソンにたいする関心と反発、影響とその不安という、相反する反応を示すものである。物語序盤の「風景画家」「小型望遠鏡」「近眼の見物人」といったイメージは、「パートルビー」が視覚をめぐる物語であること、見ることと見られることの拒否をめぐる物語であること、権力と抵抗の物語であることと深く関係している。パートルビーという筆生は、視覚と物体、観念性と身体性がせめぎあう流体のごとき形象として立ち現れてくる。

本発表で試みようとしたのはもうひとつ、エマソン思想が視覚中心主義的であるという、やや単純化されすぎたレッテルを解きほぐすことだった。エッセイ「自然論」が視覚の透明性を提示するとき、エマソンは同時に「眼球」という身体的レトリックをそこに付随させている。この点を強調したうえで、メルヴィルはエマソン思想を全否定したのではなく、両義的であったと結論した。

逆説的にその両義性こそ、超越主義にたいして抵抗してもしきれない窮屈さやもどかしさをメルヴィルの内に生起させ、結果として真っ向からの抵抗ではない、不服従の形象としてのパートルビーをうみださせた。エマソンからの影響とその不安、影響からの脱却、ということに腐心したのは周知のとおりヘン

リー・ソローであるが、ソローが物としての自然物を参照することで観念の世界からの脱却を図ったと（あえて単純化）するならば、「バートルビー」におけるメルヴィルは、観念性と身体性のせめぎあいを前景化することで、超越主義にたいする強い関心と懐疑の身振りを展開したのである。

なお、本発表の内容は、大幅に改稿を施し勉強出版から2016年に刊行予定の環境人文学論集に収められる予定である。10年弱足踏みをしていた博士論文提出後、研究の方向性を暗中模索していたときに、立教英米文学会での発表の機会をいただけたのは望外の喜びでした。この場をかりて先生方、先輩、後輩の皆様に心より感謝申し上げます。